



研究者を目指して

京都大学大学院エネルギー科学研究科博士課程
藪内聖皓

「勉強は好きですか？」

5年前、大学院入試の面接で聞かれ「嫌いです！」と即答した。そんな僕が今、大学院博士後期課程に進学しているのだから人生どうなるかわからない。

小学生の卒業文集で書いた将来なりたい職業はタクシーの運転手。タクシーの運転手になれば車で好きなところにいつでもどこでも行けると当時の僕は思っていたようだ。親が教育熱心であったことで、無理やり勉強をさせられ、もちろんやらされている感満開の僕の成績は思ったように伸びなかったが、一応私立中学校に進学することができた。というよりは個人的には周りのみんなと同じく公立校に進学したかったので、進学させられたというほうが正しい。中学高校時代はクラブ活動に明け暮れ、嫌になるくらい練習をさせられた。とはいえ、おかげで一応インターハイ、国体に出場できたことは、今となっては顧問の先生に感謝している。一年の浪人時代を経て無事大学にも入学。ついに手に入れた自由。自由を取り違えた僕は、周りのみんなと同じように(いや、それ以上に)学生生活を謳歌し、授業に出ない日々が続いた。当然そのつけは回ってきて、危うく、4回生に進学できないところまで追い詰められていた。なんとかギリギリ4回生にあがったものの大学からは要注意のレッテルをいただいた。さすがに中学・高校と私学に通い、さらに1年浪人していることで、4年で卒業しないと親に申し訳ないと強く思った僕は、鉄のように熱い指導で有名だった牧正志教授の研究室への配属を強く希望した。想像通り牧先生の指導は、とても自由を重んじる京都大学とは思えないくらい徹底したものだった。配属されるなり、現在の単位数、前期後期の履修状況、バイト、部活、卒業研究のスケジュールなど綿密な面談が行われた。なんとかして4年で卒業するという目標に向けて親身になって相談していただいた。そんな牧先生をもほとんど卒業できるかどうか不安にさせるくらい、僕の生活は乱れきっていたのだ。「必死に頑張りなさい」という言葉ももらった。

そんなこんなで卒業も危うかった僕に、大学院入試でのその質問だ。大学では単位をとるためだけの勉強に必死だった

僕から「嫌いです！」という言葉が出てきたのは、今思っても自然な流れだったと思う。結局、材料工学専攻の進学はかなわなかったが、エネルギー科学研究科に受かり、単位も無事そろって大学院に進学することができた。

勉強嫌いなのになんで大学院への進学を決めたかといわれれば、それは就職に有利であることが1番にあげられる。誰が決めたか、現在の日本のシステムでは、理系は大学院を修了しているほうが就職しやすいのだ。もちろん研究が面白いと感じていたこともあげられるが、あくまで就職が一番だ。

そんなわけで現在僕が所属している木村研究室に配属となったわけだが、そんな勉強嫌いが進学してきたわけだから、木村教授、笠田助教には大変苦勞をかけたと思う。しかし、木村先生は何を血迷ったか、そんな僕に博士課程への進学を勧めてきた。僕の研究生活を見ていれば間違いなく博士課程に進学してうまくいくはずがないのはわかるはずなのに。もちろん就職第一という僕の鉄より硬い意思是木村先生といえども崩せるものではなかった。顔を合わせるたびに「博士課程に進学しないか？」としつこく聞かれた。恋と同じでしつこいとうんざりするものだ。しまいには「絶対行きません！」と啖呵を切って就職の意思を押し切った。

念願の会社生活が始まった。にもかかわらず、2年後には会社を辞めて、博士後期課程に進学しているのである。もちろん様々なことや、思いが重なってこの結果に結びついているわけであるが、その中でも一番大きな理由をあげるとすれば、勉強が嫌いではなくなったことだろう。入社当初から、「こんな世の中だからボーっとしていたらいつの間にかリストラされるかもしれない」という危機感はずか持ち合わせており、会社に入ってから勉強熱心になった。これがまずかったのかもしれない。いつの間にか勉強して知識が身につくということが楽しくなってしまった。そして知識がつけばつくほどに、未知の世界への好奇心は会社の業務を超えて強くなっていった。今思えば、それは牧研・木村研でかなり基礎研究的なテーマを与えてもらったことが大きいのではないかと思ったりもする。また、自分の将来をしっかり見据えて人生設計を行って日々を過ごしている友人に刺激を受けたことも、自分の人生を見直すきっかけになった。

啖呵を切って出ていった僕を、木村教授、笠田助教は快く受け入れてくれた。おかげで、今では博士課程の学生として研究生活を送ることができており、本当に感謝している。今までろくに勉強してこなかったし、会社に2年勤めていたこともあり、後がないという切迫感で日々を過ごしている。他の人から言わせれば無駄な2年間だと言われるかもしれない。しかし、自分にとっては必要な遠回りだったのだと思う。覚悟を決めて入った研究の道ではあるが、やはり壁にぶつかり立ち止まる毎日である。越えなければならぬポテンシャルの山は数知れない。その山を超えた先の景色に思いを馳せ、日々切磋琢磨している。

(2009年10月7日受理)

(連絡先：〒611-0011 宇治市五ヶ庄)